

トーマス・マンとヘルマン・ヘッセのゆかりの地を訪ねて

田 中 博

はじめに

1971年の6月から8月にかけての滞独いらい、すでに6年もたっていた。フランクフルト空港に再び降り立った時は、実になつかしくうれしかった。今年ヘルマン・ヘッセが、黒い森、シュワーベンのカルプに生れて100年となるので、それを記念する行事がドイツやスイスで開かれた。特に生地カルプでは、多くのヘッセファンを集めることとなった。2年早く生れたトーマス・マンの100年祭はすでに1975年に行なわれていた。この近代ドイツ文学の巨匠達は、後年友人として交わるようになった。私はヘルマン・ヘッセに傾倒していたので、その関連からヘッセとマンの二人にだんだんと興味をもつようになった。前回のドイツは、学生達と共に、ドイツ語の実地訓練が中心だったので、ヘッセやマンのゆかりの地を訪ねることが出来ず、やっと今回、ヘッセがマンを訪ねたミュンヘンや、マンの最後の住所となったチューリッヒ郊外のキルヒベルグ、ヘッセの生地カルプ、「車輪の下」の舞台、マウルブロン神学校とマンの生地、リュールベックを訪ねることが出来た。その印象を記すことにする。

(1) ミュンヘン



英国庭園（ミュンヘン）

7月20日にフランクフルト空港でレンタカーを借りて、今回の旅は始まった。7月25日の夕方、ミュンヘンに着くまでも、知人を訪ねたり、なつかしいロッテンベルグや、バンベルグ、ニュルンベルグの田舎田舎した宿に泊って、廻り道をした。ホアイヒハイム、ニュルンベルグ、ミュンヘンのアウトバーンE6は、すさまじい雨の旅行になった。雨が降ると気温はたちまち下って、セーターを着ていても寒いと感じる程になった。ニュルンベルグから自動車でミュンヘンに入ると、最初に出会うのは、モダンなミュンヘンオリンピック村だ。ほとんど人を訪ねることのなかったヘルマン・ヘッセが、1925年、秋、彼が48歳の時に、ニュルンベルグ講演旅行の後、ミュンヘンのトーマス・マンを訪ねている。汽車の旅行ですら、非人間的なしろものと考えていたヘッセだから、私達のような、すさまじいスピードの自動車旅行は、「旅」ではないと言ったかもしれない。ヘッセはマンを訪ねた印象を次のように記している。

私はトーマス・マンのもとで一晩をすごした。彼の流儀にたいする私のむかしからの愛情の念が消えうせてしまったのではないことを、私は彼に示したのである。……夜おそくまで私は彼とテーブルをともにした。そして彼は終始一貫して立派な典雅な態度を持し、うつくしい家に守られ、その聡明さと温良さを楯として、いくぶんは本心から、いくぶんは皮肉をまじえて上きげんであった。(1)

アウトサイダーを自認する、主我的で気分のにめり込みがちなヘッセと、市民的日常生活を大切に、節度をもつ観察者マンという対称的な、近代ドイツ文学の二大巨匠が出会ったのも、このミュンヘンという地である。今回のミュンヘン行のもう一つの目的は、Institut Ton und Bildでの研修であった。研究所の用意してくれた宿は、バルドフリードホフで、市街電車の停留所の横にあった。ここはミュンヘンの中心地からSバーンと市バスを乗りついで20分程の所で、ミュンヘンの南のはずれに近かった。ホテル、ゼンティスの3階は、名古屋短大の岡田先生の家族と、私達の家族でほとんど満室になる程小さなものだ。ここを基点にして、研修に出かけたり、ミュンヘンのあちらこちらを散歩してまわることになった。今年のドイツは久しぶりに寒い夏のようなようである。ドイツに来て一週間近くなるけれど、すっきり晴れた日が少なかった。宿についた夜半には、ホテルの部屋に暖房が入った。外は激しい雨だけど、やさしい室内の温かさに守られて、めざめた26日の朝は、すがすがしい夏の空があった。南側の窓から、家並の向うに輝き光る白いアルプスの山々が見える。ドイツ最高峰のツーク・シュピッツだろうか。遠くて定かでない。南ドイツの明るい輝きがここにはある。トーマス・マンが生れ故郷リュューベックから、一足先に移り住んでいた、母や兄弟のいる、ランベルグ街2番地の家にやって来た時のミュンヘンの最初の印象は、私が今、あじわっているような明るいミュンヘンであったのではないだろうか。マン自身の作品「神の剣」の一節が、その印象を物語っている。

ミュンヘンは輝いていた。この王都のはなやいだ広場や白亜の柱の御堂、古代趣味の記念碑やバロック教会、噴泉や宮殿や庭園の上には、青い絹の天空がきらびやかに張りわたされており、この町のひろびろと明るい、緑をめぐらした、計算のゆきとどいた遠景は、美しい6月初めの日の、陽光による薄霞に包まれていた。 (2)

マンがミュンヘンに居た日時はかなりはっきり判っている。生地リュウベックから移ってきた日は1894年3月16日で、ナチス・ヒットラーの追手をのがれるために、帰国出来なくなったその旅立ちの日は、1933年2月11日である。このおよそ、39年間で、トーマス・マンのミュンヘンに住んでいた時期と言える。青年になってからの39年間は、人間にとって、マンにとって、充実した時期であったことは確かだ。だからミュンヘンのあちこちは、マンの生活や文学を思い出させるには十分なものをもっている。チューリッヒ郊外のキルヒベルグに健在のマン未亡人、カーチャは、トーマス・マンとの出会いの楽しいエピソードを、彼女の著書「夫、トーマス・マンの思い出」の中で次のように書いている。

わたしがトーマス・マンをはじめて知ったのは、市電でのちょっとした事件のあとでした。わたしはいつもきまった停車場、シェリング通りとトルコ人通りの交差点で降りて、講義をききに行きました。わたしが電車を降りようとしたとき、車掌がやってきて、「切符！」と言いました。わたしは言いました。「ここで降りるところです。」「切符をもらいます」「降りるところですと言ってるではありませんか。ここで降りるので、たったいま捨てたばかりです」「切符を出しなさい——切符とっているのです！」「いいかげんにしてください！」とわたしは言って、怒って跳びおりました。すると車掌はののしりました、「もう一度やってみろ、このあばずれ女！」これを見ていた夫は、すっかり大喜びし、自分はもうずっと以前からかの女と知合いになろうと望んでいたのだが、いよいよ時節到来だ、と考えたのです。 (3)



カウフィンガー通り (ミュンヘン)

北ドイツのリューベックからミュンヘンに移り住んだ頃の、「輝いているミュンヘン」は、やがて、色さめて、ミュンヘンのいやなところも見えてきたらしい。

カトリック的、大衆的な雰囲気は私のものではありません。私の世界はむしろ、社会的に言えば上流市民階級の世界であり、精神的に言えば、かつて教養小説を育てた、プロテスタントの内面性を持つ個人主義です。 (4)

ミュンヘンになじまないものが、あったことは確かであるが、自らこのミュンヘンを捨てて、亡命をよぎなくされるとは、夢にも考えてはいない。むしろ1923年3月1日付の彼の手紙では、ミュンヘンで一生を終るだろうと考えていたことが証明されている。

要するに私は、ある意味ではぜんぜん「私」の町でないこのミュンヘン——農民臭く、感性的で、バロックの面影をとどめているこのミュンヘン——で市民生活の根をおろし、このミュンヘンで、比較的若いころ結婚し、このミュンヘンで、イザール河のせせらぎをバルト海に打ち寄せる波の代りと聞きながら、そのすぐほとりに自分の家を建て、思いがけなくたくさん出来た——6人もの——子供たちに取り巻かれ、おそらくはこのミュンヘンで一生を終えることになると思います。 (5)

1971年夏、ミュンヘンに来た時も、一週間程滞在した。今の宿からもう一区画南のピピングプラッにある音楽家の家庭であった。そのミュンヘンで、一ついやな記憶がある。それは、中心街の中心、マリエンプラッ、今は地下鉄まであって、大変なにぎわいである。地下鉄から出ると、見上げる程の塔の時計は、人形がまわり出る有名なもので、大ぜいの観光客が、その時のくるのを待ったりして、カフェテラスでくつろいでいたりする。ここから、イザール門に向かってしばらく歩き、交差するスパークセン通りを左に折れて、一つ目の通り、ミュンツ・ブローハウス通りを右にとって、しばらく行くと、大きなビアホールに出会う、これが有名なホーフブローハウスで、それに出会った時、たちまち歴史の一ページが思い出されて嫌悪を感じた。そこは、1928年、ヒトラーのひきいるナチス党が氣勢をあげた場所であった。ドイツのその後の政治情勢が、一生をすごすつもりでいたマンをミュンヘンから、追い出してしまうことになるとは、思いもかけなかったことにちがいない。嫌悪すべき政治情勢は、一作家であるマンのところにも及んでくる様子は、手紙や本の中に認めることが出来る。1932年12月12日付、ヘルマン・ヘッセ宛のマンの手紙は、すでにナチスの影が、マンの身边にまで及んできている一つの事件を示している。

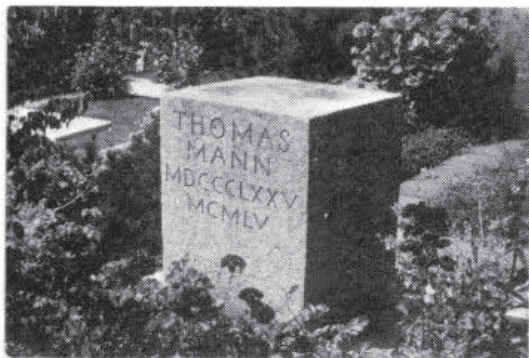
この夏には、ケーニヒスベルクの青年が、私が反ヒトラー的言辭を弄したというので、黒こ

げになった『ブデンブローク家の人びと』の普及版を一冊、送ってきざえしたものです。それには（匿名で）、抹殺作業をみずから完成するよう要求すると書きそえてありました。（6）

ヨーロッパの代表的な都市はすばらしい公園を街中に持っている。ロンドンもパリもベルリンもそうだ。このミュンヘンも幾つかの公園や小さな森がある。そのうち代表的な英国庭園は、すばらしい。その英国庭園とイザール河をはさんで向い合うところに、ハインリッヒ・マン通りとトーマス・マン通りと名付けられた通りがある。ハインリッヒ・マンはトーマス・マンの兄で又有名なドイツ作家でもあるのはご存知であろう。トーマス・マン通りの中ごろにT字型に交差するのが、ポシinger通りで、その角地が1番地で、トーマス・マンがミュンヘンで最後に住んだところといわれている。今はその家はない。ナチスの政治的圧力を身に感じながらも、まだ亡命への旅立ちになるとは知らずに、オランダ、アムステルダムでの講演旅行に出たのは、1933年2月11日であった。マン夫妻はポシinger通り一番地の家にその後、一度も帰ることが出来なかったが、すぐ後に一度、その家に戻って、マン夫妻にミュンヘンに戻ってはならないことをつけた者がいる。それは長男のクラウスと長女のエーリカであった。

ミュンヘンは敗れた、統制された。私たちは中央駅でスイスの列車から降りるとすぐに、それを感じた。その匂いをかいだ。家の運転手ハンスは、「どうか用心して下さい」と彼は震えながらささやいた。「…褐色党の連中んです。」……ポシinger通りでの、ミュンヘンでの、ドイツでの、この最後の数時間は、不安と身のけずられるようなあわただしさにみちた時だった。裏切り者ではあるが、やっぱり憐みぶかい運転手の警告を忘れず、私たちは部屋にとじこもっていた。……そこでまずとりあえず、魔法使とミーラインが講演旅行の疲れを癒しているアローザに通話を申し込んだ。……「スイスにいて下さい。こっちへきては安全じゃないんです」それで父は納得した。エーリカは到着したその日の晩のうちにスイスへ戻っていった。……私は24時間後、パリへ向かった。…私は1933年3月13日、ドイツを捨てた。（7）

(2) チューリッヒ及びキルヒベルク



トーマス・マンの墓（キルヒベルク）



エーリカ・マンの墓（キルヒベルク）

8月6日、晴れ。私達のスイスの宿は、ルッエルンからバーゼルに入る支線の小さな田舎町、ボールフウゼンにあった。今日、私が訪ねたいと思っていたのは、ここからルッエルンに出て、ツークの駅で普通電車に乗りかえてチューリッヒ湖畔にあるキルヒベルグという小さな町である。この地の教会の墓地に、トーマス・マンの墓があることを、日本でよく調べておいた。だが、実際にこの小さな駅頭に私自身降り立っても、マンの家、今なお、カーチャ・マン夫人が住んでおられる家の所在も、その墓のある教会も見当もつかない。こういう時は、大きな駅だとインホマチオーンがあって、そこに問ねるとたいいていを知ることが出来るのだけれど、…さっそく、キルヒベルグの駅の新聞等売るスタンドのおばさんにたずねた。教会は知っていたけれど、マンの家の所在は知らないといった。又、駅員にたずねれば解るかもしれないとも言ってくれた。もう一度小さな駅舎に戻って、若い駅員に問ねると、この町の地図をくれて、そのありかを教えてはくれたが、家の方ははっきり教えてくれなかった。住所は、ヘッセ宛の手紙にはっきりかかれていますので、それをたよりに町を歩けば、わかるだろうと歩きだした。ツーク、チューリッヒ間の鉄道を越えて、チューリッヒ湖を背に丘にのぼっていった。静かで、美しい住宅街らしい町並を登りつめると、チューリッヒ湖は美しく、遊らん船や、ヨットの浮ぶ様子は、トーマス・マンも、「郷愁」でチューリッヒ湖畔を書いたヘルマン・ヘッセもこんな風にながめていたのかと思うといささかの興奮をきんじえない。登りつめた丘の上に、教会の塔が見えた。夏の日で、歩く人は少なく、静まりかえっている。教会の方から一人の若い日本人が下りて来た。たずねてみると高知大学の戸口先生と名のられた。今、カーチャ夫人のいる家と、トーマス・マンの墓にもうでられたばかりだということが解り、私がここに来た二つの用件は、すぐにも実現することになった。教会の裏にある墓地には、トーマス・マンの墓を指す何ものもなかったけれど、さがしはじめるとすぐに見つかった。周りの墓よりも質素で簡単なものであった。長女エーリカ・マンの墓を横にしたがえて、THOMAS MANN MDCCCLXXV MCMLV とだけ刻みこまれたものである。MDCCC……は1875年-1955年、生年と没年を示している。マンの墓前は、赤いペゴニアの花が、みごとに咲いて、明るい風景となっていた。その墓の切れる所からは、はるかかなたに見える、対岸の町は、ミュンヘンを出たマンが、アメリカに移住をきめる間しばらく住んでいた、キェスナハトであるらしい。前回にはチューリッヒの近くまで来ながら、グループなので自由に出ることも出来ず、今回やっとマンの墓を見ることが出来てすっかり満足した。アルテ・ラントシュトラッセ39番地のマン最後の家を訪ねるには、来た道を少し下って、バス通りをチューリッヒ寄りに左折してゆけば、39番地は見つかるかと教えられたので、めずらしく晴れた、すがすがしい田舎道を下っていった。やがて、私の背後で11時45分の教会の鐘が鳴った。

私がいまこの手紙を書いているのは、エルレンバハではなく、ドルダーの山小屋です。キルヒベルクへの引越しさわぎを逃れてここへ来ているのです。引越しの主役はエーリカです。キ

ルヒベルクにとってもいい便利な家を買いました。アルテ・ラントシュトラッセ 39 番地ですが、この番地がいよいよ私の最後の住所になってほしいと考えています。(8)

1954 年 3 月 28 日付のマンの手紙は、ヘッセに宛てて出されたものであるが、この地の家が、きに入っている様子がうかがわれる。人通りのない道をかなり歩いて少し汗ばんだ頃 39 番地の家は



マンの最後の家（キルヒベルク）

見つかった。裏手はチューリッヒ湖で、立派とはいえないが、簡素なこの家が、本当にマンの家だろうかと思われた。あまり人通りのない道を、いったりきたりするのには、何か失礼なようで、写真を数枚とると、立ち去るべきだと思った。マンの書斎は今、チューリッヒ工業大学の付属マン記念館に再現されているとのことなので、チューリッヒへまわることにした。心残りだけれど、記念館の一般公開は水曜と土曜の午後 2 時から 4 時までのごく限られた日時しかゆるされないのだから、先を急ぐことにした。キルヒベルクのバスはチューリッヒのビュルクリブ

ラツというチューリッヒ湖の舟付き場が終点である。チューリッヒの中心街の入口である。チューリッヒ工科大学は右手の丘の上にあるらしいことが、テラスで昼食をとりながら地図を見ると解った。中心街をぶらついて時間を合せて、工科大学をめざし、歩きはじめた。夏休みで、夏期セミナー以外には何も行なわれていない大学の裏手に小じんまりした古い館が在って、それが、今日めざす三つ目の目的地、マン記念館であった。Thomas Mann Archiv の標示は余りにも小さく、一度は通りすぎてしまったほどである。きっかり 2 時だった。誰れ一人訪れる者もまだ居ないようだ。階下から登る階段のかべに、マンとその家族の写真がいくつもかけられていた。2 階の展示室はドアを止じていた。心なしか緊張しながらベルをおすと、背の高い番人が、まねき入れてくれた。荷物やカメラは入口に置くようにながされて、幾つかのパンフレットを手わたされ、記帳をすすめられた。幾人かの日本名も見える。再現されたマンの書斎をゆっくり眺めた。几張面なマンらしい書斎のふん囲気は、理解出来る。30 分程も、ねばって小さな展示室を見てまわったけれど、夏の午後の記念館は私以外に訪れる人はいなかった。満足して番人にお礼をいって辞去した時は、疲れが急に出て来たようで、一杯のカフェを飲もうと、丘を下っていった。逆光の中に、チューリッヒの古い教会の塔が、いくつも美しいシルエットになって、目に入って来る。

(3) カルプとマウルヴロン

スイスを去って、バーゼルから西ドイツに入った。バーゼル、カールスルーエ、フランクフルトの幹線アウトバーンをフライブルグで右に折れ地方道に入って、シュバルツバルドの保養地、フロイデンシュタットに二日程、旅の疲れをいやして、いよいよヘルマン・ヘッセの生地、カルプに向った。谷間の小さな村を幾つも抜けて、8月9日、午前10時頃、ナゴルト川にかかるマルクト橋とナゴルト川にそったビショプ通りの交差する駐車場に車を下りて、ヘッセ自身が、

私知っているすべての町の中で一番美しいのは、ナゴルト川にそうカルプだ。古いシュヴァーベンの黒い森の小さな町だ。 (9)

と歌ったカルプに着いた。昨夜は黒い森で雷鳴と大粒の氷が降ったけれど、今朝は抜けるような明るい太陽が空に輝いている。8月でも暑くはない。高原の夏を想像していただければよい。



カルプの地図

マルクト橋を渡って、右手に Dauer という洋品店が見える。ここがヘッセの生家であろうと思ったが、記念額もなく、家が新しすぎる。どうもおかしいと、市役所のある、マーケットプラッツに右折れすると、市役所に向い合って、もう一つ Dauer という店がある。やっぱりこちらが、ヘッセの生家であった。左手の柱に、IN DIESEM HAUSE WURDE AM 2. JULI 1877 HERMANN HESSE GEBOREN という額がかかげられていた。向いの市役所の入口の、案内兼電話交換手のご婦人は、階上に係りの者がいるから、訪ねよとのことで、3階の部屋を訪ねるた。女性秘書

が居て、ヘルマン・ヘッセの生誕100年祭のポスターやパンフ、カルプの町案内、等、ゆっくりとしたドイツ語で説明をしてくれた。ヘッセ文学にひかれて、カルプを訪ねて来たと言うと、この資料も、それから隣の部屋まででかけて、ちがう資料も集めたりして説明し、持って帰れとすすめてくれた。全くの好意に感謝し、一時、ヘッセはカルプに入れられなかった時代もあったことを思うと今は本当に、彼が愛され、誇りにされているのが、解るような気がした。



ヘッセ生家を示す額（カルプ）



ヘッセの生家（カルプ）

カルプの地図を入手したことと、親切な女性秘書の説明で、カルプの街とヘッセの足跡を頭の中に描くことが出来るようになって、もう一度カルプの街に出ていった。ナゴルト川にかかるニコラウス橋と小さな礼拝堂は、たちまち「青春はうるわし」のなつかしい描写を思い出させてくれる。

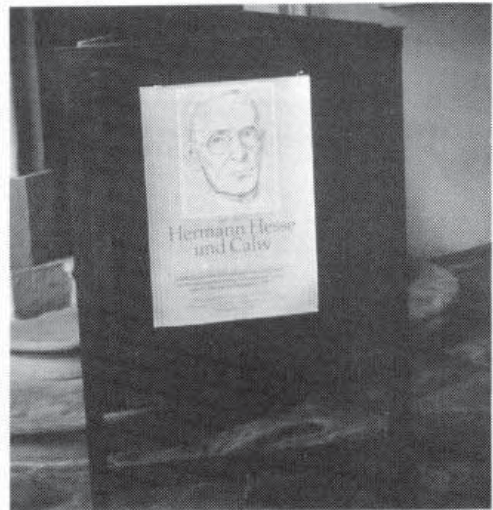
私はまず、この小さい町の一ばん古い建築物である古い石橋を渡り、橋のたもとにある小さいゴシック式の礼拝堂をながめた。このそばを私は昔いくどとなく走り過ぎたものだった。それから私は欄干によりかかり、緑いろの早い流れを川かみに向かって、そしてまた川しもに向かってながめた。（10）

ナゴルト川にはヘッセの頃と同じように、アヒルが水の上や岸边を歩きまわっているのを見ると、「青春は美し」の世界が、目の前に時間を停止したままあるようである。外の町と連ながっているビショップ通りは、車の往来がはげしい。その通りを川下にしばらく歩くと、郷土博物館がある。ここの二階に、ヘッセ記念室が、1964年に設けられたと聞いていたので、是非見たいものだと思っていた。町役場のような平凡な石造の建物で、玄関は広く開かれていた。左手に、なつかしいヘッセの顔のポスターの下には、ヘルマン・ヘッセとカルプ、特別展示会と書かれている。

生誕 100 年記念の行事であろう。幾人かの外国人の客が出入りしている。展示室の前の記帳台のノートには、ページをめくると、かなりの数の、日本人名も書き込まれている。ヘッセファンが多い日本から、この片田舎のカルブを訪ねる人がたえないらしい。



郷土博物館（カルブ）



ヘッセとカルブ特別展示会ポスター

1890 年代の半ばのことであった。わたしはそのころ、生まれた町の小さい工場で見習い奉公をしていたが、その年のうちに永久にこの町を去ってしまった。わたしは 18 歳ぐらいで、毎日

青春をたのしみ、小鳥が空気を感じるように、身のまわりに青春を感じていたにもかかわらず、自分の青春がどんなに美しいかを全く気づかずにいた。（11）



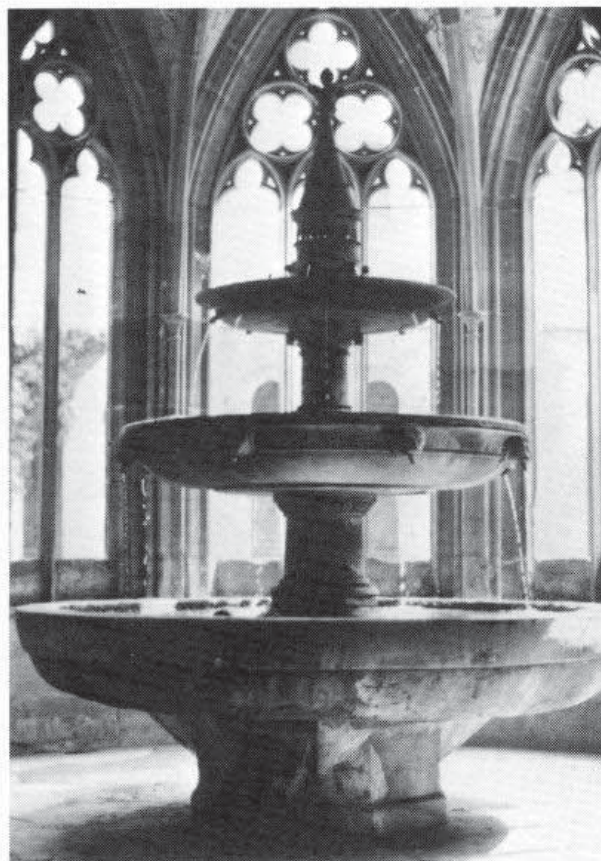
ヘッセブルネン（カルブ）

郷土博物館を出て、ナゴルト川添いにヘッセが少年の時に、しばらく見習工として働いていたペロット工場がある。「旋風」の物語のはじまりは、ヘッセ自身の体験そのままであろう。そのすぐ川下のウンター橋へ左折する角に、ヘッセの 75 歳を記念して、ヘッセ広場に造られた、ヘッセブルネンが移されている。泉の周りには、色とりどりの花が美しく咲き、ヘッセのレリーフがうめられた石柱から、たえず水が落ちている。トーマス・マンが北ドイツ、リューベックで余り好遇されていないのに較べて、ヘッセは幸せであると思わせる風

景だ。郷土博物館の裏手には、鉄道が通っている。「青春は美し」の出だしの、ゆっくり大きなカーブを描いて丘を下ってきた汽車もここを走り、弟のフリツが別れのあいさつに花火を上げる、メルヘンのようなシーンも、この鉄道のイメージから生れたものにちがいない。「車輪の下」のシュトットガルトへ受験のために出発する駅もカルプのこの駅のことであろう。市役所も教会も学校も、ヘッセの世界と二重像となって私には近づいてくる。レーダー通りを抜けてもう一度、マーケットプラツに出た。この小さなカルプの街全体を、つかみ取っておきたい衝動を何度も感じた。はるばる遠くから、永年の念願の割りには、余りにも短いカルプの滞在であった。地方道 463 号、10 号、35 号と走りついで、マウルブロンに着いた。ヘッセ自身マウルブロン神学校に学び、途中退学をした。彼にとっては大きな試練であり、文学へ向かわせた転機であった場所である。その体験は、「車輪の下」に見事に花咲き、その主人公の死を通して、ヘッセの生をもたらしたものであろう。



マウルブロン修道院（マウルブロン）



修道院内の泉水

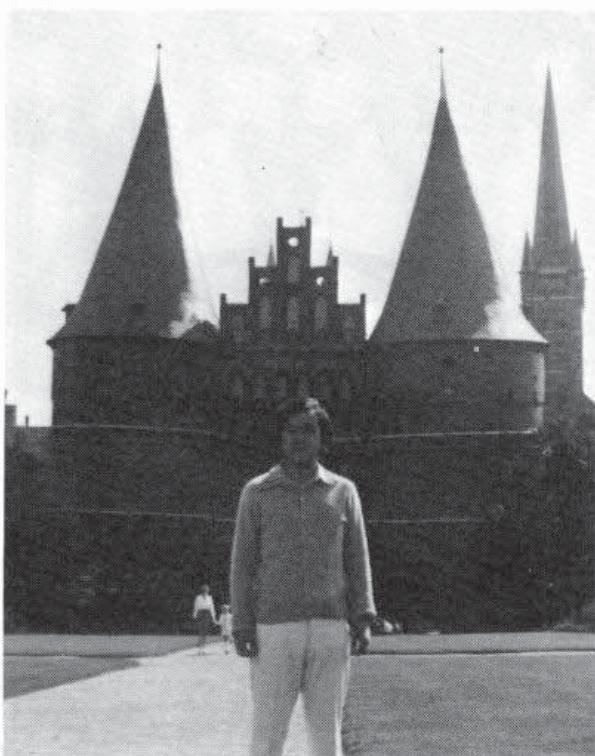
州の北西部に、森の多い丘陵と、小さいしずかな湖水とにはさまれて、大きなシトオ派教団の修道院、マウルブロンがある。宏荘に堅固に、そして昔ながらのすがたで、このいくつかの美しい古い建物は立っている。…この修道院をおとずれようとする者は、だれでも、高い塀についている、画のような門をとおって、ひろい、非常にしずかな広場に出る。そこには噴水が

わいている。(12)

マウルブロン修道院は今も、ヘッセの描いたままにある。広場に車を入れて、見物時間までにまだ時間があるので、周りをぐるぐる歩いてみた。広場の中心の泉は工事中で、少し残念である。右手後方にまわると、ファウスト博士の塔が残っている。修道院に接して、錬金術のドクトル・ファウストが居たなどは、ヘッセの「知と愛」のヒントになっているのだろう。その姿の美しさのゆえに日本でも、良く知られている礼拝堂の泉水は、修道士の手洗いに使われたとの説明に、幻想の美ではなく、実用的美であったのかと妙な感心をした。この神学校の中で、ヘッセ自身の青春、知的なもの、霊的なもの、悪魔的なものの混とんの出会いがここにあったのだろう。

カルプとマウルブロンを訪ねることによって、いかに彼の多くの作品が、そこに在るのかを再確認したのは大きな収かくであった。

(4) リューベック



ホルステン門 (リューベック)



ブデンブローク・ハウス (リューベック)

8月16日、南ドイツ、オーストリ、スイス、南ドイツと、マンとヘッセのゆかりの地を訪ねる旅は、今日の北ドイツも、北のはずれ、ここからは、すぐ東ドイツの国境、バルト海に近いリューベックで、一まず終ることになる。トーマスマンは1875年6月6日、リューベックに生れた。彼の略伝の一節、「父が自分や家族のために建てた市内の優雅な邸で育てられたが、マリーエン教会の近くに、昔からの家屋敷があって、そこを第二のハイムにしていた。」という記述にある、市内の優雅な家は、ベッカー通り52番地にあったようだが、戦時中破壊されてしまっ

いて無く、文中の第二のハイムが、今、ブデンブローク・ハウスとして残っている唯一の、マンに関連のある家ではないかと思われる。遠くその家を訪ねてきた私にとって失望以上のなものでもなかった。なぜなら、今は銀行の建物で、玄関の上に、レリーフがあるだけで後は何もない。銀行員にたずねたが、マンに関する物は何も無いとニベもなく、同じメング通り 48/50 のシャッペルハウス、一階はレストランになっているが、本には、マンのむかしの部屋が保存されているとのことで訪ねたが、ここも今は何も無いとの返事にすっかり落胆してしまった。1955年3月3日リューベック名誉市民の称号を受けた彼も、彼の人生の軌跡のゆえにか、今もなお遠い存在であるような印象を私は、リューベックをおとずれてみて解ったような気がする。

注

- (1) 世界文学大系 ヘッセ・カロッサ p. 476 築摩書房
- (2) トーマス・マン全集 VIII 「神の剣」 p. 161 新潮社
- (3) カーチャ・マン著 「夫、トーマス・マンの思い出」 p. 24～p.25 築摩書房
- (4) トーマス・マン全集 XII 「書簡集」 130 フェリクス・ベルト宛て p. 203 新潮社
- (5) 同上
- (6) 井手貢夫・青柳謙二訳 「ヘッセ＝マン往復書簡集」 p. 26 築摩書房
- (7) クラウス・マン著、渋谷寿一訳 「反抗と亡命」 転回点 2 p. 178～p. 181 昌文社
- (8) トーマス・マン全集 XII 「書簡集」 ヘルマン・ヘッセ宛 p. 581 新潮社
- (9) ヘルマン・ヘッセ著 「ふるさと」
- (10) ヘッセ著作集 「青春は美し」 p. 17 人文書院
- (11) 「」 「旋風」 p. 55 人文書院
- (12) 実吉捷郎訳 「車輪の下」 p. 70 岩波書店